

2013年7月10日 発行

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

どなたでもいつの会でも参加できます

6月の「森三郎の作品を読む会」では、「おばあさん」・「柏野大納言」(どちらも、「赤い鳥」昭和7年5月号初出・どちらも、森三郎童話選集「夜長物語」所収)を読みました。

「昭和7年5月号」の「赤い鳥」には、森三郎の名前で「おばあさん(幼年童話)」、忍川保二の名前で「柏野大納言(童話)」の二作が載っている。

これまでは作品を独立のものとして一作ずつ取り上げてきた。しかし、今回この二作品にもしろい共通性と相違点があることに気が付いた。

共通点はどちらも「夢」が関わっていることである。

「おばあさん」はひよんなことから魔法にかかっていた小鳥を助けたので、小鳥が三つの願いをかなえてくれるという。そんなことは本気にしないおばあさんは、ぐっすり昼寝のできる大きなかご、羽の入ったやわらかいまくら、誰にも邪魔されずにお月様の中で静かに一ねいりすることを心の中で願う、それが実現する。そして「きつと今でもお月さまの中で、かごにはいったまま、リンゴのゆめでも見ながら、ぐうぐうねてあるのでせう。」と結ばれている。

一方「柏野大納言」では、子どものいない夫婦が清水の観音様に願をかけると、奥方が「空からきのこが一つ落ちてきて袖に入る」という夢をみる。そしてその夢の通り、空からきのこを手にした男の子が落ちてきて、こどもにするという話である。(下段へ続く)

Q. 七月一日って何の日か知っていますか？

同じ夢だが、片や自分が空に上り、願った通りのんびり昼寝をし、片や空から、願っていたように子どもが落ちてくるという、おもしろい取り合わせである。

同じように「夢」を小道具にしているが、それぞれ舞台は違う。

「おばあさん」は、どっさりなったリンゴでジェイイやリンゴのお酒を造ったり、牧場にそった小道や羊飼いの男が登場したりというように、舞台は外国であろう。(海外作品の再話かどうかはわからない。) それに対して「柏野大納言」は、昔話の要素をふんだんに取り入れ、王朝文学の流れを感じさせる作りである。

「赤い鳥」を創刊号からずっと、くまなく読み続けていた森三郎は、一つの同じ傾向の作品だけでなく、さまざまジャンルを書き分けることができたのではないだろうか。森三郎が編集記者として「赤い鳥社」に入社するのは昭和七年六月だが、彼はそれより前から優れた編集者の資質をもっていたのではないか。「赤い鳥」自体が森三郎を育ててきたと言ってもいいかもしれない。

なお、「夢」はこれまでの作品でも重要な役割を担ってきた。「夢買ひ」はもちろん、「みかん」、「夜長物語」などである。

A.

七月一日は「童謡の日」

一九一八(大正七)年七月一日、「赤い鳥」創刊の日にちなんで、日本童謡協会が一九八四(昭和五九)年に制定した記念日。

「赤い鳥」創刊号の斬新な表紙に家族一同感嘆した話は、「森三郎童話選集 かささぎ物語」の酒井晶代先生の解説に詳しく載っている。

次回予定 平成25年8月9日(金)午後1時〜3時

「わらび餅」(「赤い鳥」昭和7年7月号初出)

森三郎童話選集「かささぎ物語」所収

「坂本龍馬」(「赤い鳥」昭和7年7月号初出)